説教余滴、クリスマス百科３回目、もみの木

クリスマスの定番、もみの木についても諸国の伝説を紹介しています。
シシリー島のある修道院に秘蔵されている古文書ではこのような話が。
≪降誕の夜、すべての被造物はベツレヘムの家畜小屋で、主を讃め、幼子に贈り物を捧げた。森の木々も、オリーブの木はその柔らかい実を、ヤシの木はその堅い実を捧げた。小さなもみの木は何も贈るものがなかった。その上、ひどく疲れていて、立っていることさえできなかった。他の大きな木々はそんなもみの木を後ろの方へ押しやり見えなくしてしまった。すると、近くにいた天使が、この小さな木を哀れに思い、天の星に向かって誰か降りてきて、もみの木にとまってくれないかと頼んだ。星は快く承諾して、木の枝にとまってロウソクの灯のように輝いた。幼な子は美しいこの光景を見て、ほほえみ、祝福し、クリスマスには、子供たちを喜ばせるために、いつもロウソクをつけることになるだろうと言われた。≫

フランス・アルサス地方の伝説もあります。
≪聖フロランタンが、子供たちを喜ばせてやりたいと思ったが、貧しくて贈り物を買うこともできなかった。ある時、森で、雪や氷がついて非常に形の良いもみの木を見付けた。それを切って家に持ち帰り、クルミやリンゴできれいに飾り、小さなろうそくで明かりをつけた。子供たちはみなこの珍しい物を見て大喜びだった。≫

もっともっとあります。クリスマスには何よりもみんなが喜ぶことが大切です。御子のご降誕を喜び、それをもっと多くの人に広げて行く。喜びの拡大再生産です。地上で喜びがあれば天の御国でもそれ以上の喜びがあります。
田浦教会の関係者で御国へ帰る方が多い年でした。残されたご家族にもメリークリスマス！